
幻想絶滅危惧種保存委員会

紫藤さやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想絶滅危惧種保存委員会

【Nコード】

N3601BA

【作者名】

紫藤さやか

【あらすじ】

井上空、能気な看護学生。ある日背中からニョッキリ羽が生えてきて。どうなる私！って、どうにもなりません。ほのぼのラブコメを目指します。

1 チキンラーメンが食べたい

テレビの中では、メタボおじさんが一人、チキンラーメンを食べていた。

人気アニメ映画「崖っぷちのプニヨン」の名場面だ。

そのチキンラーメンがとにかく旨そうなのだ。

私は口を半開きにして画面を食い入るように見つめていた。

チキンラーメンを食べてみたい。

それが、私の夢だ。

でも…。

「空は鶏肉食べちゃだめだからね。絶対！」

母がそういつたから、私は鶏肉、チキンと名のつくものは今まで避けてきたのだ。

あ、「空」^{そら}っていうのは私の名前。

井上空、18歳、看護学生。

ずーっと祖母、母、私の女系家族だったけれど、一昨年前に祖母が亡くなった。その後、母が結婚し、旦那の仕事の関係で海外へついて行っちゃったため、現在自宅で独り暮らし中である。

母が出て行った後も、キチンとチキン禁止を守ってきた。

おそらく自分は鳥アレルギーなのだろう。

と、思っていた。

今の今までは。

2 なんじゃこりゃあ

「なんじゃこりゃあ……」

私は、がつくりと膝をつき、茫然としていた。

テレビをみていたら、突然、部屋中に白い羽毛が舞い散った。

テレビの中ではプニョンが旨そうにチキンラーメンの汁を飲みほしていたが、それどころじゃない。

背中がズキズキと痛む。

何が……起こったの？

バサリという大きな羽音に振り向くと、巨大な翼が迫っていた。

ひいい何コレ……って、私の背中から羽が生えているの??

慌てて鏡を見ると、背中から白い大きな羽がによつきり生えていた。

……何じゃこれ？

嘘でしょ……？

ペタリと座ったまま動けない。

着ていたＴシャツは無残に背中で破れている。

お気に入りＴシャツが……。

そういえば、ここ最近、妙に背中がかゆいと思っていた。

かゆいというか、熱いというか。

部屋の掃除をさぼっていたし、まさかダニ発生??

慌てて布団を干して、掃除機をかけてみたけれど、背中のかゆみは治らない。それどころか、背中が痛い。熱が出るときに体の節々が

痛くなるような、あんな感じだった。

ダニーの仕業ではないらしい。

これは病院に行った方がいいかも、と思ったけれど、健康優良児の私は病院なんて歯医者に五年前に行ったきりだ。内科に行くべきか、外科に行くべきか、はたまた皮膚科に行けばいいのか。どこにしようかな。迷っているうちに、今日にいたる。

まさか、これは、いや、しかし、なぜ、どうしてこうなった？
混乱しながらも考える。

……更に考える。

- 1・自分は鳥と人間のキメラだった。
- 2・先祖代々鳥に呪いをかけられていた。
- 3・神様から天使に選ばれた。

うーむむむむ……。

3はロマンチックだけれど、自分が神だったら、もっとピュアな子供を選ぶと思う。2の鳥の呪いなら、鳥をずっと食べずに頑張ってきた私よりも、カーネ おじさんが呪われるべきではないだろうか。では…1？ 怖い。怖すぎる。

そういえば昔、母にきいたことがあった。
どうして空にはパパがいないの？ と。

「パパは遠いお空に飛んでいったのよ」
母は遠い眼をしてそう答えた。

パパは死んじゃって天国にいったんだ。
幼いながらにそう解釈していたが……まさか、本当にお空に飛んでいったとか？？

そして、鶏肉禁止の理由は……？

お母様。

もしや、私のお父様は鳥なのでしょうか。

だから、あんなに鶏肉を食べるのを嫌がったのですね。
って、まさかそんなワケないよね？

考えたところでわかるわけがない。

「どういうことなの、お母さん！……！」
母に国際電話をかけた。

『なにが？ 空、元気にしてた？』

陽気で呑気な声が聞こえてくる。

おのれ、自分だけは楽しく海外生活満喫しちゃって。しかも、旦那とラブラブで。

「羽が。羽が生えてきたのよ。いきなり！！ 背中に……！」

私がとなると、呑気な声が返ってきた。

『あらー。パパに似ちゃったのね。成人才メデトー！』

なんですとー？

「ぱ、パパって？ まさか鳥じゃないよね？ 鶏肉食べちゃダメっていつてたけど、それって……」

『はあ？ すっごくかっこいい天使だったわよ。なんとなく翼の生えている生き物食べさせると共食いの気がしちゃってさー。あはは』

あははじゃないよ、まったく。

「て、天使？ その人、もしかして、今も生きてるの？ どこにいるの？ その人も背中に羽が生えてたの？」

勢い込んで聞くと、母は何でもない事のようにいう。

『はえてたわよ。普段はしまってたけど。まさか今頃になって空に羽が生えてくるなんてびっくりねー。でも、彼がどこにいるのかは知らなーい。空がお腹にいるうちにジョーハツしちゃったからね！ 大丈夫よ、羽しまつとけば普通に生活できるから。あ、ダーリン、モーニン！ 空、またねー』

無情にもガチャン、と電話は切れた。

酷い。

ひどすぎる。

だーりんもーにん？

母よ、いつから外人になったんだ。娘のピンチよりダーリンですか。まあ、そりゃあ、恋人と上手くいけばいいと応援もしたけれど、しましたけれど、でもちよっと。

よく考えてみたら、私は父のことをまるで知らない。

パパは遠いお空に飛んで行っちゃったのよ。

昔から母はそういつていた。母は一切、父の話をしなかった。

だから、私は死んじやって天国にいるのだ、と勝手に解釈していたのだ。

普通、そう思うでしょ？

まさか、本当にお空を飛んでいたとは。

もしかして、自分はハーフなのでは、と思ったことは何度かあった。日本人顔で、母親に似ているが、髪の色や目の色が茶色い。特に後ろから見たときの髪のふわふわ加減と頭の形は欧米系っぽくみえるらしい。あくまで後ろ姿限定だけど。それにしても、母が惚れっぽいのは知っていたが、相手が外人ではなく、人外だったとは。

しかもジョーハツっていったい…。

これからどうなるのだ、私。

3 泥棒さんのように

これからどうなるのだ、私。
そう思ったが、どうにもならなかった。

とりあえず、寝ようと思って寝て（羽が邪魔で寝にくい）、とりあえず、起きようと思って起きたけれど、羽は生えたまま。
不幸中の幸いは、看護学校が夏休みに入っただけ、ということだろうか。

でも、夏休みはバイトの予定だ。
パン屋のバイトの面接は明後日だったはず。

でも、この恰好で外に出るのは…。
こんなに破れたＴシャツで外に出るのはちょっとエッチだよね！
じゃなくて。

とりあえず、家中をひつかきまわし、大きな唐草模様の緑色の風呂敷を引っ張り出してきた。
これで、羽をつつめば…。

ものすごく苦勞して羽をスッポリと風呂敷でつつみ、荷物のように結ぶ。

昔話に出てくる絵に描いた泥棒さんのようだ。
鏡の前でお縄頂戴のポーズをとってみる。なかなかいける。
これで、外に出ることにした。

Ｔシャツの破れた部分は風呂敷で隠れているし。
まずは、ごはんの調達だ。

「あら、空ちゃん、お買いもの？　ずいぶんといっぱい買ったのね」
さっそく、すぐに近所のオバちゃんに見つかる。

「ハイ。彼氏ができたので、がんばっていっぱいお料理作ることにしたのです」

言い訳も完璧。

特に怪しまれた様子はないな。よしよし。

「お、空ちゃん、家出？」

「ウン、おらこんな街ヤダ。東京さでるだ」

近所の自転車屋のオジちゃんにも見つかるが特に問題なし。楽勝。うしうし。

「おお。それなら、この自転車に乗って東京さ行け。8万円のところ、7万8千円にまけてやる」

オジちゃんを無視してコンビニでカップめん等を買いきみ、とりあえず帰ることにする。お腹が空いた。早くカップ麺を作ろう　マルシャン　赤いきつね

普段はお鍋でつくる5個パックのインスタントラーメンがスタンダードだが、今日は奮発。

いろいろ買い込んだ。

これから、どうするかな。

お父さん探すにも手がかり少なそうだなあ……。いろいろ考えながら歩いていると、パラパラ、と原付が私の横を走り抜け、前で止まった。

「井上空か？」

いきなり原付の男が話しかけてくる。

ヘルメットをかぶっているの、顔がよくわからない。

姿勢が良く、ガタイがいいせいだろうか。原付がやけに小さく見える。

「えと、はい」

誰だっけ、と思いながらも、相手も私の名前を聞いているから親しい人間ではないのだろう、と思い直す。

「乗れ」

男は原付の後ろをアゴで指している。

「……」

カッコイイ大型バイクの後ろならまだしも、原付の後ろってねえ？
っていうより、知らない人についていっちゃ駄目だし。

男がヘルメットを脱いで、私に放った。

ヘルメットが宙に弧を描くその一瞬に、膨大な思考をした。

さっきまで見知らぬ男がかぶっていたヘルメットをかぶれというの
だろうか？ なんとなく汗臭そうで嫌だ。それよりも、男が思った
以上のイケメンなのに驚く。が、そのイケメンがつるつばげなのに
更に驚く。ハゲでもイケメンはイケメンであることにおまけに驚く。
眉毛が凛々しいではないか。鋭い眼光。が、ハゲの年齢はよくわか
らない。ワイルド系に見えるのはハゲゆえだろうか。

思わずヘルメットをキャッチする。

「いいから、早く乗れ。俺は怪しい者ではない」

十二分に怪しいハゲのイケメンがいった。

「早く乗れ。時間が無い」

男が焦ったように言い、空を見あげた。

つられて上を見て、初めて気が付いた。

電線にびつしりとカラスが止まっている。

しかも、カラス達は冷たい眼でじっと私を見ていた。

……なにこれ？

ゾツとして、あわてて臭そうなヘルメットをかぶると原付の後ろにまたがり、男につかまった。ふわりと汗ではないなにかの香りがあった。

パラパラ。

すぐに原付は走り出した。

私が小柄だからかもしれないが、思ったほど原付の後ろは怖くなかった。

どんどん細い道へ、山の方へ入っていく。

良く知っている場所ではあるが、流石に不安になった。

「ねえ、どこへ行くの？」

男は何もいわずに原付を走らせる。

ノーヘル男の後頭部がまぶしい。

どうしよう。

もしかしたら、悪い人なのかもしれない。

若禿かと思っただけで、もしかしたら、その筋の人なのかもしれない。

マンガでみるヤザの脇役の一人は、何故か絶対にハゲだ。

さつきちらりと見た顔もイケメンではあったけれど、妙な迫力があつたような気がする。ハゲ効果かもしれないけれど。

これは、やばいかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601ba/>

幻想絶滅危惧種保存委員会

2012年1月10日23時45分発行